

感染症リスクの言語的コミュニケーション

—不確実な表現の印象の比較—

岡本 真一郎

(愛知学院大学心身科学部)

Key words: リスク・コミュニケーション, 感染症, 言語表現

目的

SARS, 新型インフルエンザなど, 世界的な規模での感染症の発生が懸念されている. 万一それらが発生した場合には, 人々にそのリスクを伝達する必要があるが, それは正確である必要があるし, またいたずらに不安を煽るものであってはならない. そのためには伝達内容を精査することも重要だが, 言語的な形式にも配慮が求められるだろう.

日本語の文末表現は伝達内容や受け手に対する送り手の態度, 評価, 確信度などが伝達される箇所として重要である. 感染症のリスクに関しては確定的事実ではなく見込み, 推測を伝える場合が多いことが予想される. その場合に推量の助動詞などをを用いた不確実な表現が用いられることになる.

本研究ではそうした諸表現の印象を比較することにより, 的確な表現を選択する手がかりを得ることを目的とする.

方法

参加者 東京都内の大学の男女学生 84 名.

言語表現 以下の 10 タイプの表現を比較した.

(断定形), —と推測される, —そうである, —に違いない, —と聞いている, —ようである, —と聞いたような気がする, —と思われる, —かもしれない, —らしい

質問紙の構成 次の 10 種類の事態フレームに上の 10 表現を挿入した.

1. このウイルスが人に感染する可能性は高い.
2. 感染地域は今後拡大する.
3. このウイルスは家禽類に重大な病気や死を引き起こす.
4. 病気の家禽に直接触れると人もウイルスに感染する可能性が高い.
5. このウイルスは人にも重篤な病をもたらす.
6. 家禽と直接接触しなければ感染の危険は低い.
7. このウイルスが人への感染例は少ない.
8. 感染は今後収まっていく.
9. このウイルスの人への影響は軽微である.
10. 人に感染しても致死率は低い.

質問紙を 10 タイプ作成し, 言語表現と事態フレームをカウンターバランスした.

従属変数 以下の 3 尺度に関して 7 ポイント・スケールで評定を求めた.

不確実な(1)ー確実な(7)

不安な(1)ー安心な(7)

信頼性が低い(1)ー信頼性が高い(7)

結果

各尺度の評定の言語形式別の平均値を Fig.1 –Fig.3 に示す. 言語形式間の差を検討するために, それぞれ 1 要因の分散分析を行った. いずれも, 主効果が有意であった($F(9,747)=34.40, p<.001$; $F(9,747)=6.09, p<.001$; $F(9,729)=29.28, p<.001$).

考察

不確実な表現の中では「推測される」「ようである」「思われる」の評定値が, 確実性, 信頼性ともに高い. したがってある程度高い確率ではあるが, 断定ができない場合には, これらの表現を用いれば信頼感が高いと受け止められる可能性がある. ただ, 低確率の際に信頼感を高める表現に関してはさらに検討の余地がある.

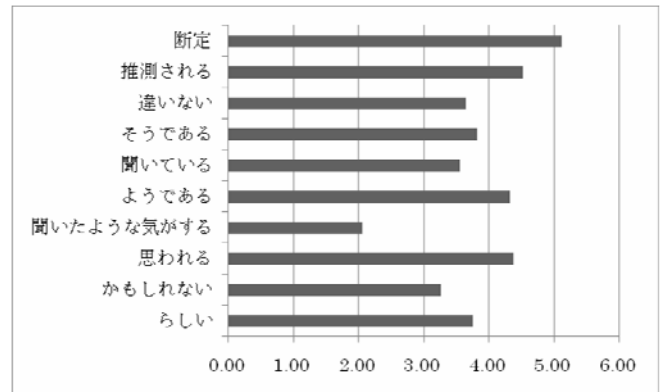


Fig.1 不確実なー確実な

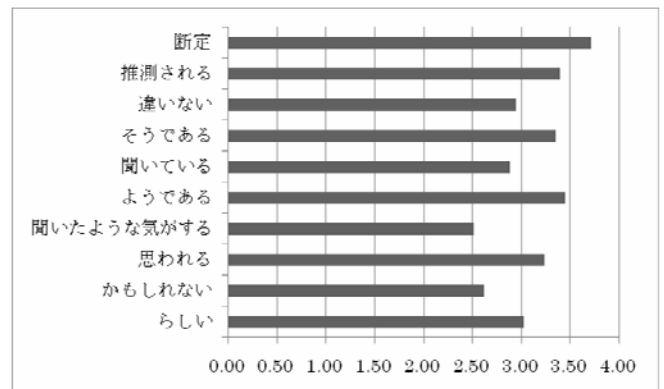


Fig.2 不安なー安心な

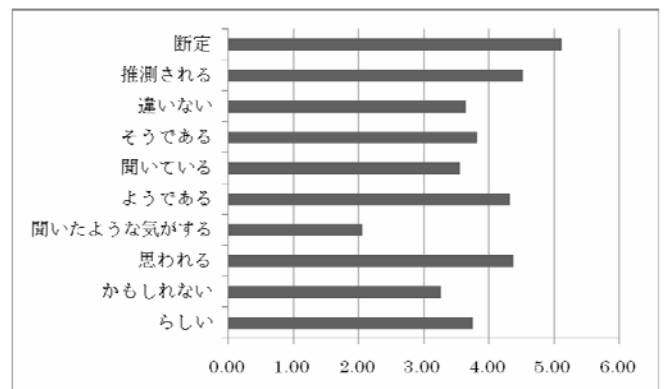


Fig.3 信頼性が低いー信頼性が高い

(注)

本研究の実施に当たっては平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金(健康危機管理・テロリズム対策システム研究事業)「健康危機管理におけるクライシスコミュニケーションのあり方の検討」(主任研究者:慶應義塾大学商学部・吉川肇子)からの補助を受けた。(Okamoto Shinichiro)